2020 年 7 月 5 日　　日本基督教団 八ヶ岳伝道所　主日礼拝　NO.1127
聖　　書　　イザヤ書 38:16~17／ヨハネによる福音書 11:23~27
説　　教 『 未知を迎え入れる 』

これも主の多様な創造なのか。私は就学前から今日までずっと、全体主義的なものに拒否感を抱いていた。保育園の登園拒否、中学校の頭髪チェックへの反抗、デモの時のシュプレヒコールでは連帯感がかえって萎んだ。

創造の多様性のせいで、ことあるごとに同調圧力との摩擦で労苦させられた。

聖書を根拠にしながらも、イエスを思い浮べると、私に何かしら偏りがあることを自覚している。どの教会でもイエス像は三位一体で一致しているが、そのイメージとなると一人ひとり各々のイエス様であろう。つまりキリストは個々人の期待に模られている。

教会の教えに唯々諾々従っている信仰はつまらないが、自己のイメージをイエスに投影した信仰は、ある意味もっとつまらんのではないか。イエス像に自己を投影しても予定調和だが、自己の内に未知のイエスを迎え入れて信仰は啓かれる。

イエスは弟子たちに「あなたがたはわたしを何者だと言うのか」と問い、ペトロが「あなたは、メシア(救い主)です(ﾏﾙｺ 8:29)」と答えた。メシアには違いないが、受難を認められず(8:31~32)、弟子共々こっぴどく叱られている(8:33)。ペトロが期待したメシアは、十字架にかからない世の勝利者だった。

注目したいのはマルタの答えだ。彼女は、教えに没入する妹マリアとの比較で、もてなしの台所仕事に忙殺されて、イエスにたしなめられたことがあった(ﾙｶ 10:41~42)。

マルタは来客への気遣いを尊ぶ「女の鑑」のようだが、無論それだけが人間性のすべてではない。彼女は、伝統的な規範に生きながらも、教え込まれた信仰に拘泥せず、イエスの未知を迎え入れる柔軟性を持っていた。

イエスが「あなたの兄弟は復活する(ﾖﾊﾈ 11:23)」と告げると、マルタは「終りの日の復活の時に復活することは存じております(11:24)」と答える。あたかも教会の教えのごとく、終りの日の復活を知っているようだ。するとイエスは、マルタにとっての未知なる救いを語る。

「わたしは復活であり命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる(11:25)」。それを信じるかと問われると、「はい、主よ、あなたが世に来られるはずの神の子、メシアであるとわたしは信じております(11:27)」と答えた。

ペトロら直弟子は、未知のメシアを受け入れられなかったが、マルタは柔らかくこれを受容した。

「世に来られるはずの神の子」という証言は重要だ。イエスによって、俗なる地上と聖なる御国が結びつく。何かと煩瑣な「女の鑑」を果たしながら、マルタは自己の真ん中にイエスの未知を迎え入れた。

「生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない(11:26)」。イエスの復活と命に与る者は、死んでも生きる(11:25)だけに留まらず、生きている時も死の恐れに捕われない。

「主が近くにいてくだされば、人々は生き続けます(ｲｻﾞﾔ 38:16)」。「生き続ける」の原意は、「すべてのもののための主の霊の命」。私たち人間は、主の霊の命によって存在している。

マルタが、復活と命であるイエスを「地上に来られる神の子メシア」と証言したように、「主の霊の命」が「わたしの罪をすべて、あなたのうしろに投げ捨ててくだる(38:17)」その赦しと愛とを、この地上で感じたい。

「あなたはわたしの魂に思いを寄せ、滅びの穴に陥らないようにしてくださった(38:17)」。

「主の霊の命(38:16)」に無償で与り、私たちの魂は復活されたキリストの命と共にある(ﾖﾊﾈ 11:25)。

★

≪おまけのひとこと≫

信仰を守るとは　信じた所に留まることではない　目の前に押し広げられる隘路へ踏み出すこと
問われ　答え　キリストが狭き門を開く　保守でも改革でもどちらでもいい　そこをくぐるなら